

大串明弘作 「おむすびの味」

< 前編 >

(効果音) (ドアのチャイム)

有馬裕 いらっしゃいませ。

鈴木明 いいか、お前。大体なあ、クリスチャンなんてな、みんなウソつきだよ！ あ、マスター、おれ、アメリカン。

阿部実 僕はブレンドをお願いします。おい、何でクリスチャンがウソつきなんだよ！

大川敏明 (オフ)僕はアメリカン。

裕 はい、アメリカン2つとブレンド1つですね？

裕ナレーション わたしの名は有馬裕。48歳のクリスチャンです。ある出来事ですっかり生きる意欲を失って、会社勤めを辞め、その後やっと立ち直ってこの喫茶店を始めてから、早いものでもう3年になろうとしています。ここは近くに大学がるせいもあり、お客様の大半が学生さんです。今のお客様も学生さんで、いわゆる常連客です。

実 ナレーション だから、何でいつもクリスチャンのこと、そう悪く言うんだよ。彼は、阿部実君。青春大学2年生。彼は地元出身で、ご両親と一緒に教会に通う、熱心なクリスチャンです。

明 ナレーション 戸に飼う、おれはクリスチャンが大嫌いなんだよ！

明 ナレーション 彼は、鈴木明君。同じく青春大学2年生。高校生の時、実君の学校に転向してきたそうで、なぜかは知りませんが、クリスチャン嫌いなのです。不思議なことに、この2人は親友で、普段はとても仲がよいのですが、宗教の話になるといつも熱くなってしまうのです。

明 だってよ、クリスチャンって、いつも人の顔見ると「神様信じろ」って言うじゃねえか！ そんなの宗教の押し売りだよ！ なあ、敏、お前もそう思うだろう？

敏明 うん、まあ…。

実 敏！ お前までそんな風に思ってたのか？

敏明 いいや、そうじゃなくて…。

明 ナレーション 彼は、大川敏明君。同じく青春大学2年生。ほかの2人とはクラスが一緒だそうで、みんなから「敏」と呼ばれています。彼は協調型で口数の少ない人で、いつも2人の板挟みになってしまっていて困っているようです。

明 年は人がよすぎて言えねえだけで、ほんとはそう思ってたんだよ。まあ、フリークは違うけどな。

実 あいつは生ぬるいクリスチャンなんだよ！ 真剣に神様のこと信じてたら、あんなバカばかりやってられるかよ！

(効果音) (ドアのチャイム)

裕 いらっしゃいませ。

田宮かおり(フリーク)マスター、どうも。風邪治りました？

裕 お陰様で、大分よくなりましたよ。ほら、このとおり(胸をたたくが、せき込む)

かおり マスターったら、また強がり言うから。大事にしてくださいよ。

裕 いやいや、かたじけない。

ナレーション 彼女は田宮かおり。みんなからは”フリーク”と呼ばれています。フリークと言っても、だれかタレントの追っかけとかをやっているのではなくて、彼女がフリーターをしていてクリスチャンだから、みんなに”フリータークリスチャン”と呼ばれ、それが縮まって”フリーク”になったのだそうです。彼女は、明君や実君と高校が同じで、彼らと仲がよかったらしく、暇になるとひょっこり顔を出すのです。女の子でフリーターをやっている髪も染めているのですが、根はしっかりした、思いやりのある優しい女の子です。

かおり ヤッホー！ ねえ、大声で何話てんの？ 外まで聞こえたよ。

明 今なあ、「クリスチャンはウソつきだ」て実に言ってたんだよ。まあ、お前は違うけどよ。

実 だから、何でクリスチャンがウソつきなんだよ。

明 こないだ、お前の教会行ってるやつで、何ていったか名前忘れたけど、そいつが万引きしたってみんな言ってたぞ。いつも「盗んではいけません」って言うくせに、何で万引きなんてするんだよ。

実 それは、うわさだろう？ それとも、あいつが万引きするところをお前が見たのかよ。

明 じゃあ、お前だってあいつが取ってないって言い張れんのか？

実 大体、ほんとに神様のこと信じてれば、そんなことするわけないよ。もしあいつが万引きしたんだったら、神様のこと信じてないからだよ！

かおり ねえ、それはちょっと言いすぎじゃないの？

実 何でだよ。だってそうだろう？ 神様のこと愛してたら、どうして神様の悲しむことするんだよ。

かおり でも自分の力ではどうにもできないことってあるんじゃない？

明 それによ、「殺してはならない」って言うてるのに、どうしてクリスチャンが戦争したりするんだ？ 聖書にもクリスチャンが悪人を殺したりしたことが書いてあるんじゃないか？

実 それは、旧約聖書の出来事だろう？ 旧約と新約は違うんだって…。

明 大体、お前らはいつも言うじゃねえか、「祈ってます」ってよ！ 人が具合が悪かって言うと、「祈らせていただきます」とか、さも善人ぶって言うじゃねえか。「祈ってます」とか言って本当に祈ってるのかよ。口先でそういうだけで祈って

ないんじゃないのか？

実

…。

明

クリスチャンなんてしょせんウソつきだよ。偽善者だよ！

実

うるさいな！ お前だって、聖書も何も知らないくせに、偉そうなことばっか言うなよ。もうお前なんかとは口を利かないからな。お前なんか、お前なんか…絶交だ！

明

ああ、絶交でも何でもしてやらあ！

ナレーション

実君は、カウンターの上に苦々しくコーヒー代を置いて行ってしまいました。このケンかで、何となく気まづくなったのでしょうか。残りの3人もバタバタと帰ってしまいました。

裕モノローグ

やれやれ。2人ともカッカしちゃって。若いなあ。まあ、すぐまた仲直りするさ。わたしと違って、やり直しは利くんた。大学2年生と言えは、^{はたち}20歳か…。うちの息子も、生きていれば彼らと同じだ。あれからもう4年か。

ナレーション

わたしは、皆さんの飲み終わったコーヒーカップを片付けながら、ふと息子のことを思い出しました。そう、あの時勇はまだ16でした…。

(音楽)

(回想)

有馬勇

父さん、話があるんだけど、いいかな。

裕

ああ。どうした、勇？

勇

あの根、言いにくいんだけど、実は… 僕…。

裕

何だ、はっきり言ってみろ。

勇

実は、僕、洗礼を受けたいんだ。

裕

何だって？ せ、洗礼って、お前、あの母さんと同じキリスト教のか？

勇

そうだよ。

裕

何言ってるんだ、お前！ 洗礼を受けるってことはキリスト教に入信するってことだぞ！ 宗教なんてやめろってあれほど言ったじゃないか！

勇

でも、キリスト教はほかの宗教とは違うんだ。キリスト教は本物なんだよ。

裕

いや、宗教と名のつくのは皆同じだ。それにキリスト教って言えば、献金とか言って毎月収入の10パーセント取られるんだろう？ 母さんがそんなこと言ってたぞ。

勇

違うよ。献金はそんなんじゃない！ “取られる”っていうんじゃないくて自分から進んで“ささげる”んだよ。神様が与えてくださったお金の一部を神様にお返しするのが献金なんだ。

裕

何？ お前にやっている小遣いは、だれからもらってると思ってるんだ？ 父さんが汗水流して働いて稼いでくる金だぞ！ 神様なんかじゃなくて、父さんがやってるんだ。

勇

確かに父さんが働いて稼いでくれるけど、それも神様が…。

裕 うるさい！ とにかくダメだ！

母ルツ子 あなた、わたしからもお願いします。わたしが勧めたんじゃなく、勇が自分で決めたことですから。

裕 お前は黙ってる！ キリスト教はお前だけでたくさんだ！ とにかく洗礼はダメだ。おれは絶対に許さんぞ！

勇 ...僕、父さんが反対しても洗礼は受けるつもりです。

裕 何だと？ 親に逆らって洗礼を受けるだと？ そんなやつはうちの子じゃない！ 勘当だ！（多重エコー）

(音楽) (回想終わる)

(効果音) (ドアのチャイム)

裕 あ、実君。またまたいらっしやい。

実 マスター、さっきはすいませんでした。店の中でどなっちゃったりして。

裕 いやあ、いいんですよ。

実 みんな、もう帰っちゃったんですか？

裕 ええ。皆さん心配してらっしゃいましたよ。

実 そうですか…。ねえ、マスター。何で明はあんなにクリスチャン嫌いなのかなあ。

裕 そうですねえ。明君は明君なりに理由はあるんでしょうねえ。いつだったか、明君、教会に行ってたって話してましたよ。

実 え？ 明が教会に行ってた？

裕 ええ。何でも、こっちへ越してくる前に行ってたらしいですよ。

実 それなら余計不思議じゃないですか、あのクリスチャン嫌いは？

裕 実は、わたしも昔は宗教が大嫌いだったんですよ。特に宗教をやっている人がね。

実 え、マスターが？

裕 ええ。以前父が新興宗教に入信したことがありましてね。その教祖にだまされて、全財産を取られてしまったことがあったんですよ。そんなことがあってから、宗教と聞くだけでも鳥肌が立つようになってしまったんです。

実 へエー。そんなことがあったんですか。そのマスターが、どうしてクリスチャンになったんですか？

裕 ええ。実は、わたしにも実君と同年の息子がいたんですよ。

実 え？ マスター、息子さんいらっしやったんですか？

裕 そうなんです。勇っていいました。亡くなった家内も実はクリスチャンでしたが、わたしにもよく仕えてくれたんで、しづしづ教会へ行くのは認めていたんですが、ある時、一人息子の勇までが、洗礼を受けたいと言い出しましてね。父のことがありましたから、その時は猛反対したんです。それでも受けるって言い

張ったので、感情に任せて言ってしまったんです。「親に逆らって洗礼を受けるなんてやつは、うちの子じゃない。勘当だ！」って。

実 ふーん。で、どうしたんですか、息子さん？

(効果音) (電話音)

裕 ちょっと失礼。はい、もしもし、ああ、かおりちゃん。先ほどはどうも。実君？ ええ、来てますよ。え？ 明君が車に跳ねられた？

ナレーション わたしの胸には、一瞬、悪夢のような記憶がよみがえりました。

実 あ、マスター、おれ代わります。もしもし、フリーク？ どうしたんだ？ 明に何かあったのか？ え、交通事故？ 駅前の病院だな？ 分かった。すぐ行くから。

裕 駅前の病院ですか？ じゃあ一緒に行きましょう。今車出しますから待っていてください。

実 でもマスター、お店が…。

裕 店なんか閉めればいいんですよ。それより、早く行きましょう。

ナレーション わたしは、駐車場に止めてあったわたしの車に実君と乗り込み、エンジンをかけました。もう辺りは薄暗く、肌寒い空気がわたしたちの不安を募らせます。

実 明のやつ、大したことないといいんだけど…。

ナレーション 助手席に座った実君の顔は、さっきの激しい口ゲンカはどこへやら、友達を気遣って真剣そのものでした。わたしも不吉な予感を覚えて、思わずハンドルを握る手に汗がにじんでいました。

(効果音) (車の走る音)

(音楽) (オーバラップして不安な音楽)

<後編>

ナレーション 病院に着くと、わたしたちの心配とは裏腹に、待合室に、頭に包帯を巻いた明君が元気そうに座っていて、そばにかおりちゃんと敏君がいました。

実 おい、明、大丈夫なのか？

裕 明君、無事だったか！

明 へへ、大したことないよ。いや、お前とケンカしてすぐ店出たんだけど、おれも少し言いすぎたかなって考えながら歩いてたんだ。ほら、おれって、なんか考え事始めちゃうと周りが見えなくなっちゃうだろう？ それで、赤信号の横断歩道渡っちゃってさ。車にちょっと引っ掛けられて、少し頭打っちゃっただけなんだ。レントゲンとか撮ったけど、異常ないってさ。

実 何だ、脅かすなよ。心配して損しちゃったよ。

かおり ほんとよねえ。わたしも急いできたら、このベンチで暇そうに漫画なんか読んでんだもん。全く人騒がせよねえ。

敏明 僕なんか、バイト抜けてきたんだからな。

明 すまんすまん。それにマスターまで来ていただきちゃってすいません。

裕 いや、そんなことはいいんだよ。それより無事でよかった。どうかな、皆さんおそろいのようなだから、明君の無事を感謝してうちで感謝会でもしませんか？
今晚はわたしのおごりだ！

全員 「やったぁ！」「さすがマスター、太っ腹！」

ナレーション わたしはその時、心底ほっとしていました。あの悪夢の再来は避けられたのです。

(効果音) (ドアのチャイム)

裕 さあさあ座ってください。しかし、よかったですねえ。大したケガじゃなくて。今、
コーヒー入れますからね。

全員 (口々に) すいません。

実 ...明、ごめんな。絶交だなんて言って。

明 いいんだよ。おれもちょっと言いすぎちゃったし。だけど、おれのケガを聞くとこ
うやって飛んできてくれるところを見ると、お前のキリスト教ってのは、やっぱホ
ンモノかもな。

実 なら、どうしてそんなに毛嫌いするんだよ。

明 ...実は、おれも昔教会に行ったことあるんだ。こっちへ越してくる前のことだか
ら、みんなは知らないと思うんだけど。

実 さっき、マスターから聞いたよ。

明 当時、うちの両親の仲が険悪で、離婚の話をしてたんだ。で、2人ともおれを引
き取りたいからって、まるで自分に都合のいいことばかり言うんだよな。そん
な両親を見ていて、「大人ってみんなこうなんだろうか？ 人間って、こんな自
分勝手な生き物なのだろうか？」って思い始めたんだ。ちょうどそう思っていた
ころ、うちのポストにキリスト教にチラシが入ってた。そのころは、クリスチャン
ってみんなキリストのように心のきれいな優しい人なんだろうって思ってたから、
それを見て、「ああ、おれもクリスチャンになりたい」って思ったんだ。教会に行
き始めてしばらくしたある日、親しくなった一人の婦人会の人に、両親が離婚
するかもしれないってことを話した。そうしたら、親身に相談に乗ってくれて、最
後に「ご両親のために毎日祈らせていただきます」って言ってくれたんだ。他人
の話をこんなに熱心に聞いてくれて、しかも毎日覚えて祈ってくれる人が世の
中にいるんだって思うと、心の底が熱くなって、涙があふれてきた。ところが、
その次の日曜日のことだった。

教会の女性 この間から来てる鈴木さんて子の両親も、話を聞くとひどいらしいわよ。あそ
まで行っちゃっちゃ祈ろうにもねえ。

明モノローグ あ、あの女の人だ。クリスチャンなんてこんなものか！ 人には「祈っていま

す」なんて言っておいて、実は祈りもせず、陰口をたたく偽善者なのか！

明
かおり それからだよ、おれが完ぺきにキリスト教嫌いになったのは、
そっかあ。確かに教会の中にそういう人もいるかもしれない。でもほんとは信
仰ってそんなんじゃないのよ。もっと、何て言うかメチャクチャまじめなの、真剣
なの、生きるってことに。

裕
明 わたしもかおりちゃんの言ってることは正しいと思うな。
え？

裕 さっき、ちょっと実君には話してたんだが、実はわたしには子供がいたんです
よ。一人息子で、勇といいました。君たちと同年なんですよ、行きてれば、も
うかれこれ 4 年前になるんですが、洗礼を受けたいって言い出しましてね。当
時わたしは大の宗教嫌いで、その時息子にとてもひどいことを言ってしまった
んです。「親に逆らって洗礼受けるやつは、勘当だ」って。今思うと息子はわた
しの言葉にひどく傷ついたんだと思います。あの一言が心残りだね。今でも思
い出すたびに、「勇、悪かった」と思わず言ってしまうんです。

かおり 息子さん、...勇君、どうして亡くなったんですか？
(音楽)
ナレーション (回想)
あの日は、息子の洗礼に大反対した次の日で、3 月のある暖かい日曜日でし
た。息子はその日も、3 週間後のイースターに洗礼を受けるから、礼拝後、そ
の準備会にも出てくると言い残して、家内と一緒に教会に向かったのです。わ
たしは不機嫌で一言も口を利きませんでした。

母 お父さん、じゃあよろしく願いますね。帰りに買い物をしてきますけど、夕
食までには戻ってきますから。お昼はお父さんの好きなおむすびを作っておき
ましたから、食べてください。では行ってきます。勇のこと、どうぞ分かってあげ
てくださいね。

勇 行ってきます。
裕 ...。

ナレーション わたしは、いらいらした気持ちがどうにも静まらないので、ゴルフの練習場へ
行くことにしました。練習場で2時間ほど打ち、おなかがすいてきたのですが、
妻が作ったおむすびを食べる気にはならなかったもので、途中で外食をして家
に帰ったんです。門の前まで来ると、うちの電話が鳴っているのが聞こえたの
で、わたしは急いでカギを開けて中に入りました。

(効果音) (電話の音)

裕 もしもし、はいそうです。はい、確かにうちの者ですが。え！ ルツ子と勇が交
通事故!?

裕 その電話は警察からでした。無免許の少年が運転していた車が歩道に突っ込
み、たまたまそこを歩いていた妻と息子が跳ねられ、病院へ運ばれたとの知ら

せでした。わたしが病院に着いた時はすでに遅く、息子は息絶えていました。看護婦さんの話では、「父さん、聖書を読んで。イエス様を信じて...。」と一言言って息を引き取ったそうです。妻も間もなくあとを追うように息を引き取りました。

実 そうですか...。そうだったんですか...。

明 それから、マスターどうしたんですか？

裕 (回想しながら)病院から帰ってくると、家の中はもう薄暗くなっていました。妻と息子を同時に失い、わたしには死しか残されていないと思い、明かりもつけずに、死に場所を求めて家の中をさ迷い歩きました。台所のドアを開けてみると、部屋いっぱい差し込んだ夕日の中で、一つだけ白く輝いているものがあるんです。それは、その朝、わたしのために妻が作ってくれたおむすびだったんです。焼きおにぎりと、中にサケや佃煮の入ったノリ巻き、みんなわたしの好物でした。

裕 わたしは、それをムシャムシャほうばりました。涙が混じって、やたらしょっぱい味でしたが、何だか妻の手のぬくもりがまだ残っているようでした。

ルツ子 (エコー)お父さん、勇のこと、分かってあげてくださいね。

勇 (エコー)お父さん、聖書読んで。イエス様信じて。

裕 わたしは、意を決して勇の本棚から聖書を取り出して、読み始めました。わたしの知らないうちに、よくもこんなに読んでいたのかと思うほど、いたるところに赤線やら書き込みがしてありました。新約聖書のマタイの福音書から始めて数日後、ヨハネを読み進んでいた時でした。12章24節の言葉に出会ったんです。

聖書朗読(女声) 一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

裕モノローグ 一粒の麦、...もし死ねば豊かな実を結ぶ...

ナレーション わたしは深いことは分かりませんでした。その時ふっと、“勇や家内が死んだのは、おれが神を信ずるためだったのかな”って思ったのです。そうしたら、なぜか涙が出て止まりませんでした。

その日から、わたしは亡くなった2人が通っていた教会に、毎日曜日通うようになりました。神様が、ご自分のたった一人のみ子イエス・キリストを十字架にかけて、わたしのために命を捨てるほどに愛してくださったということが分かるまでに、それほど時間はかかりませんでした。

今は、勇の気持ちが自分なりによく分かります。あいつは、人生の目標を“キリストのために生きる”と決めて、真剣にその道を歩もうとした。そして母親と2人で、このわたしのためにも真剣に祈ってくれた。その祈りが通じたんだと思いますよ。

さあて、おなかすいたでしょう？ これがマスター自慢のメインディッシュです。
どうぞ、どんどん食べてください。

実 あれ、おむすび？

かおり どんな豪華版かと思ったら…。

敏明 期待して損したかなあ。

明 でもこれ、ひょっとして…。

裕 (笑う) そう、家内が地上でわたしのために最後に残してくれたのとおんなじおむすびです。神様の愛を見せるのって難しいけど、結局のところ、その人のことを自分のように大切に思って、その人が一番してほしいことをしてあげることかなあって、こいつを作るたびに思うんですよ。さ、どうぞどうぞ。

4人 (口々に) 頂きまーす！

ナレーション 食膳の祈りを終えると、4人は黙々とおむすびを食べ始めました。みんなそれぞれに、それぞれの味をかみ締めているようでした。

< 完 >